

200回
特別企画

いしかり博物誌

石狩って、どんなところ？その答えとして、市民の皆さんに知ってほしい石狩市の自然や歴史を紹介する「いしかり博物誌」。1999年に連載スタートし、今回、第200回を迎えました。

「いしかり博物誌」200回で取り

上げられた地域は、南は花川から北は雄冬まで。市全域をカバーしています。さらには市内だけに収まりません。外国の先住民文化との比較(第47回)や1911年のトリノ万博(第113回)、地球規模の気候変動(第29、93回)、地球外生命?(第133回)まで、石狩を見る視点は世界、宇宙にも広がります。

* * *

* * *

連載開始時には発掘調査の真つ最中だった石狩紅葉山49号遺跡は、2003年に調査終了。出土遺物は9万点以上となり、その一部が石狩市の文化財に指定されました(第142回)。チョウザメの神様、石狩弁天社と金龍寺の鯨様像(第15回)は北海道指定文化財となり、黄金山は国の名勝になりました(第101回)。

(志賀健司)



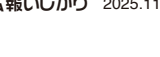
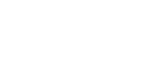
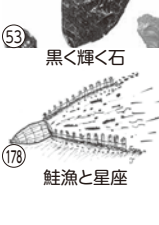
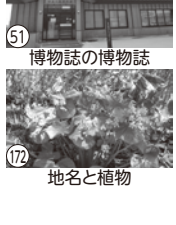
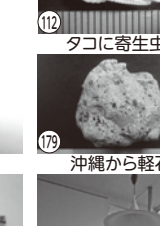
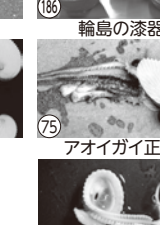
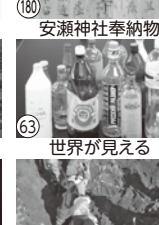
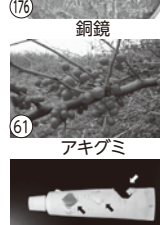
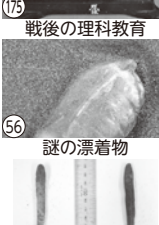
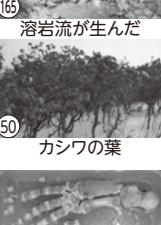
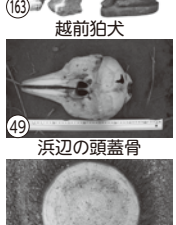
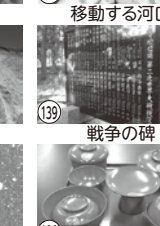
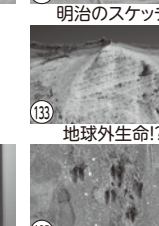
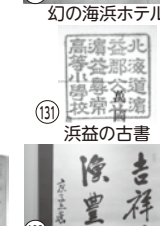
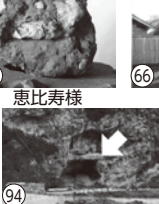
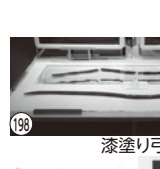
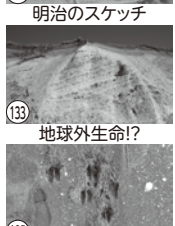
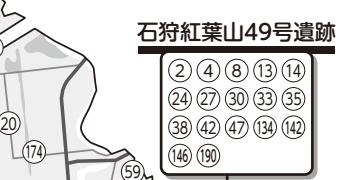
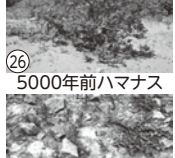
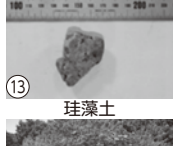
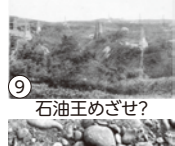
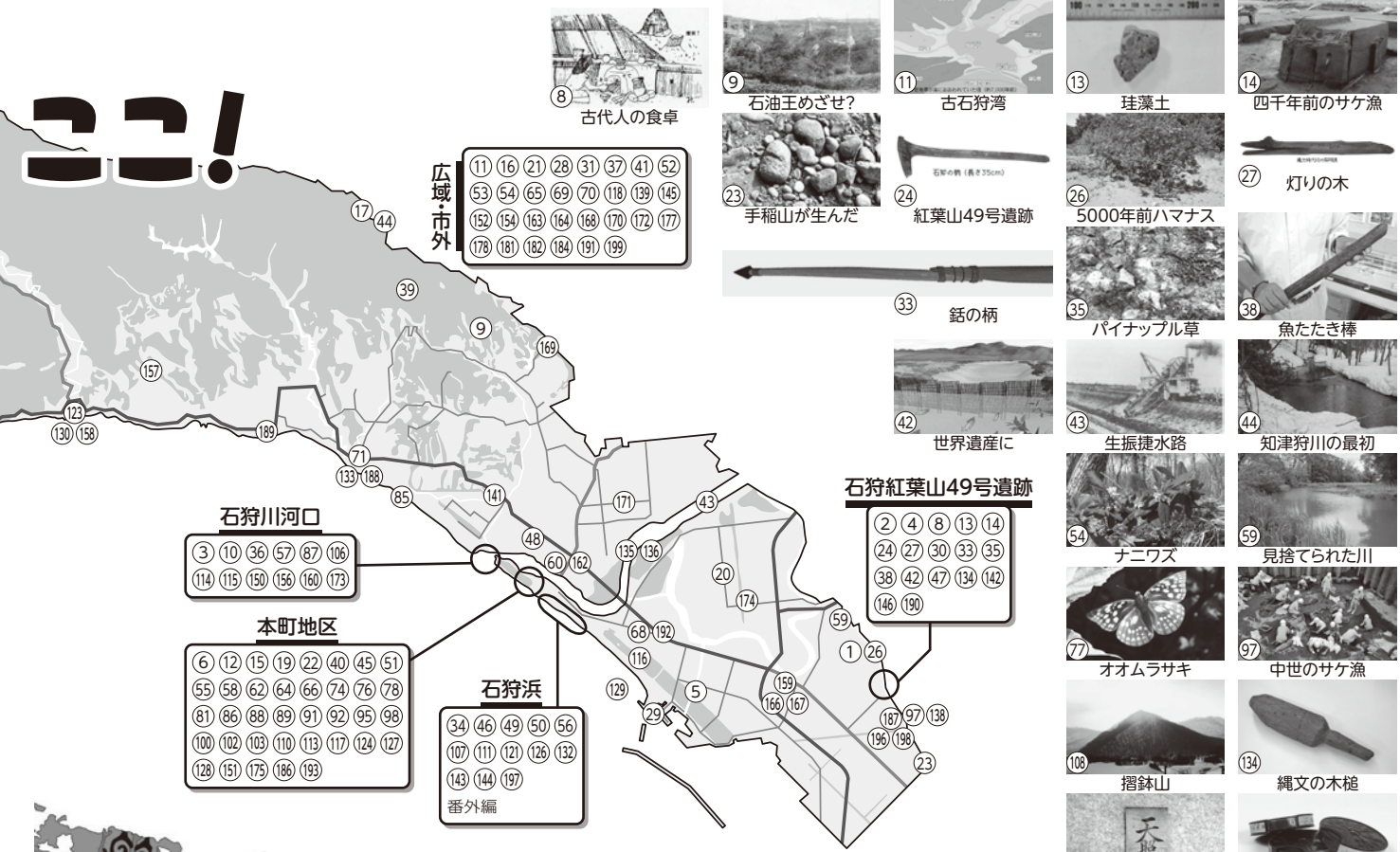
この26年の間にも、いろいろな変化が起きたり、新たな発見が追加されてきました。いちばん大きな変化は、やはり2005年の石狩市・厚田村・浜益村の合併でしょう。南北約70kmに伸びるまちとなり、旧石狩市で「いちばん高い山」は阿蘇岩山頂そばの標高約360m地点(第17回)でしたが、今は群別岳(1376m)です。

海や空に目を転じると、2001年にはマイナス23.1℃と石狩での観測史上3番目に低い気温を記録(第29回)しましたが、その後は暖かい年が増えました。本来は亜熱帯に暮らす貝やクラゲが流れ着いたり(第93、194回)、ジンベエザメが現れたことも(第129回)。



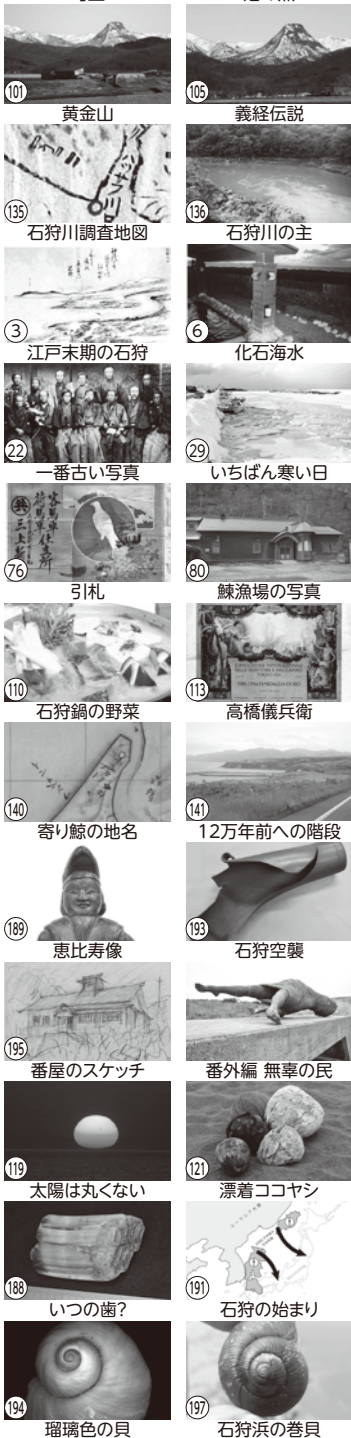
図文化財課 いしかり砂丘の風資料館 ☎62・3711 ※火曜休館

33!



200回の舞台は

①などの数字は「第〇回」を示しています。



「いしかり博物誌」の過去の回は全て市HPでご覧になれます。



お
執筆者たち、推しのISHIKARI!

市民の皆さんに“これだけは知っておいてほしい”石狩のこととは?!
6人の執筆者たちが語る、とっておきのISHIKARI推し情報です♪

志賀 健司

こいしかりわん
古石狩湾

花川や生振など市南部の平地では、地下からクジラの骨が出てくることがあります。実は今から6千年前、その二帯は古石狩湾と呼ばれる海だったのです。

この町はどうして低い、平らな土地が広がっているのか。地形にも全て、理由があります。それを意識してまわりを見直してみれば、町の隠れた素顔が見えてきますよ。(第11回「石狩をおおっていた海——古石狩湾」参照)

専門は地質学・漂着物学・海辺学。地球の環境の変遷などを調べるとともに、石狩の浜辺にどんなものが漂着し、それが持つ意味を研究しています。

工藤 義衛

石狩観光の
はじまり

石狩の鮭漁は大量に獲れること、アイヌが従事する地引網漁というエキゾチックなイメージが江戸時代から関心呼び、明治から地引網漁が行われなくなる昭和40年代まで観光資源となっていました。全国に知られる石狩鍋は、戦後も続いた鮭地引網観光ブームによつて全国に広まっていったのです。(第92回「石狩観光のはじまり」参照)

専門分野は考古学と風俗史。石狩独特の文化を研究する一環で石狩の食を代表する「石狩鍋」の歴史やルーツについても調査しています。

石橋 孝夫

浜益区の象徴
黄金山

黄金山は古くから浜益アイヌが人々を守ってくれる神聖な存在として大切にしてきた山です。また、「こがねやま」の名はすでに18世紀末から松前や本州に知られていました。そして明治になると「ふるさとの山」として「浜益富士」の別名もつけられました。(第101回「黄金山ピンネタイオルシペ」参照)

専門分野は考古学と石狩史。石狩紅葉山49号遺跡の発掘を手がけたほか、縄文時代から江戸時代に至るサケ漁の方法や文化について研究しています。

内藤(前野) 華子

大都市近郊に残る
自然海岸

石狩海岸は、ハマナスやハマボウフウなどの海浜植物群落、エゾスカシユリなどの草原性植物が彩る海岸草原、大規模なカシワの天然生海岸林、そこに暮らす多様な生物相など、全国的にも数少なくなつてしまった海浜の自然が見られる場所です。

25年前の執筆時から変化した部分もありますが、保全によつて守られ、今なお生物多様性に富んだ海浜生態系が残る場所です。(第18回「大都市近郊に残る自然海岸」参照)

専門分野は植物生態学。石狩浜の生態系保全のための植生調査や植生管理、ハマナスの保全再生に関わる活動などに携わっています。

荒山 千恵

石狩紅葉山
49号遺跡

この遺跡では、紅葉山砂丘の麓を流れていた川を利用した縄文中期の人々の暮らしの跡が見つかりました。とくに川の跡からは、サケを捕獲するための杭列や柵、タモ、魚たたき棒、櫂、たいまつなど、約4千年前の希少な木製品が数多く出土しました。当時の道具から、石狩のサケ漁のルーツがみえてきます。(第142回「市指定文化財 石狩紅葉山49号遺跡出土の木製品」参照)

専門は考古学。市内の遺跡や出土品の調査を中心に、地域の歴史・文化にかかわるモノ・コトについて研究しています。

坂本 恵衣

サメ様



「石狩市には「サメ様」と呼ばれる神様が祭られています。宝珠山金龍寺の妙法亀善神と、石狩辨天社の妙法亀善大明神です。このサメはいわゆる海の鮫ではなくチヨウザメで、古くから石狩川の主として祭られていたようです。サメ様はいずれも鮭漁の神として石狩の漁業者からあつく信仰されてきました。(第15回「二つの鮫様」参照)

専門は文化人類学。地域信仰について調べるとともに、石狩の人々の生活の中で宗教がどのように考えられていたのか、歴史の変遷などを研究しています。